

羅津要塞重砲兵

宮城県 高橋 寛

私は昭和十八（一九四三）年十一月十日、志願兵により羅津要塞重砲兵連隊第六中隊に入隊致しました。動機は私の祖父は日露戦争で金鵄勲章功七級の勇士で、私達は子供ながらも、その実戦状況を毎日のごとく聞かされてきました。そして子供ながらも戦争とは嫌なものだと思い、それは筆舌に絶する苦難の戦であった話のように記憶していて、今更ながらつい昨日のこのように感じていました。

父は大谷地村五十五人より婿養子として当家に入り、軍隊には行きませんでした。が頑固一徹の親であり、負けず嫌いの性格の持主でした。それで部落では昔から他所から来た人間は村はずれにされる風習があり、婿に来て社会的に貢献出来た人は一人もいない村でした。その実家五十五人の長

兄、叔父は、当時では珍しい陸軍軍曹で、金鵄勲章功六級で、当時は在郷軍人分会会長でもあり桃生郡会議の最後の郡会議員でありました。また後に大谷地村の収入役である傍ら、文部委員長の役職にもあり、私の祖父とは金鵄勲章仲間として戦友の仲でした。ですから婿養子としてもらいに行くのと、二言なしで承諾してもらい受けることがすぐ決定しました。こうして親同志の間で縁組が決り、我が家に入籍、婿養子になったと聞いております。

そんな中、五十五人の従兄達三人兄弟も、皆叔父の命令で志願兵として志願し、三人共戦死しました。我が兄弟も三人が志願兵として入隊しました。長兄真三兄は十八歳で志願して、陸軍輜重隊仙台に入隊し、中支の杭州に派遣され、運良く四年間戦地において陸軍軍曹の一等級で除隊しました。同級生が入隊するころには既に恩給の恩恵を受け、大谷地在郷軍人会の分会会長や副分会長として、青年学校の指導員や軍用保護馬の指導長などをやる

など、一日たりとも家事に手を出す暇がありませんでした。

二番兄は石巻商業学校三年生の時に甲種飛行予科練習生として死を覚悟の志願兵でしたが、万死に一生を得て帰郷、終戦直後、直ちに我が家に帰り、家族は大喜びでしたが、祖父は敗残兵扱いで笑顔は全然見せなかつたそうです。

私は昭和十八年十一月十日、志願兵として羅津要塞重砲兵連隊に入隊しました。その連隊は雄基にありましたので、博多の船着場で入隊式が行われ、そのまま雄基まで直行でした。輸送隊長は陸軍中尉武山松五郎隊長で、運良く同じ桃生郡大谷地の後谷地の、しかも私の長兄と同級生で、凄く力強かつたことを今でも忘れたことはありません。

それで私が入隊前には折しも偶然三人兄弟が一緒になり、お互いに今生の別れと「頑張れ」と励まし合つて別れましたが、その時の気持ちは今でも言葉に表現することは出来ません。

我ら約九百人は羅津要塞重砲兵連隊第六中隊に

入隊しました。家で考えていた軍隊生活と百八十度の差があり、羅津の寒さと風は世界的に有名な場所で、死を覚悟で志願したものの祖父の頑固さを痛切に怨みました。しかしこれはいかんとする事が出来ず「先んずれば人を制し、後れば人に制さるる」の格言通り、先ず何事も人後にならなという事を心に決め、頑張りました。

入隊初日には、明朝の起床ラッパのことが心配で眠れませんでした。が、何せ眠らずにいましたのですから第一班で一番先に整列したのは当然私でした。そして入隊翌日の点呼の時には班長より一同の前で賞賛を受け、一期検閲の班長が決りました。

日一日と練兵は厳しくなりましたが、私はむしろ楽しみながら励みました。かくして月日が経つのは早いもので、あつと思つ間に一期検閲も終わり、様々な幹部候補生や下士官候補生及び憲兵などの試験があり、小生も候補生に合格しました。

教官は凶らずも同村の後谷地生れの陸軍中尉で

格端砲台の砲手長でした。同中尉は入隊前は海軍兵学校の剣道講師をやっており、海軍は嫌で適齢を延期して陸軍に入隊した人でした。銃剣道とも二八段で、全国軍司令部對抗試合で二回連続優勝し、全国でも各部隊では知らない人がいないという度胸と武道で威名をとどろかせました。それはそれは別格扱の教官でした。

班長は福島県出身の高橋軍曹で、これまた下士候補生出身で、学科であれ観測、通信、砲手など全般にわたり天才とも言えるべき練達兵で、必要な操典等も丸暗記している人でした。

そして一〇センチ加農（カノン）砲、一〇センチ榴弾砲、三四センチ加農砲などの操作など、一挙手一投足を絵に書いたように熟練した班長でした。

現在、小生は八十三歳になりますが、このような人はいないと痛感いたしております。

それに加えて部下に対しては非常に愛情に満ち、軍歌が好きで、砲台への行き帰りは、必ず軍歌で

一日の苦労や難儀を一扫し、明日への鋭気を養ってくれるという人情家でした。

勤務していた砲台は、砲台とはいえ宿舍は半地下兵舎の三角兵舎でした。また要塞地帯ですの外出はほとんどなく、文通も一々班長や教官の査閲がなければ葉書も出すこともできず、正に籠の鳥と同様でした。

家からの祖父の便りには「元気の二字頼む」で、返信「我は毎日元気で練兵に励む」と、そのような厳しい教育でしたし、余計な字は書けない、また書かされない状況でしたので一般の兵隊の状況などはほとんど文通には無縁でした。

終戦近くになり、関東軍華やかな時に入隊した砲兵の教育でしたので、あくまでも勝ち戦の時の訓練だったと覚えていました。

その時、突然「二号演習」の命令があり、濟州島の陣地構築に行きました。候補生以外の戦友は全滅、また本州の九十九里浜への派遣軍はB29の空襲に会い、これまた全滅とこのことを、敗戦十日

前に聞き、正に運の軍隊生活を送ったと言つても過言ではありません。

現在、終戦になつて生存しているのは、元齋藤實総理の甥である佐藤清氏ただ一人です。靖国神社構内に残っている二四センチ加農砲には、生き残つた戦友の名が刻まれ、昔を偲びながら眠っております。

いろいろ語りたい思ひ出は一日中お話ししても尽きません。今は亡き戦友を思いながら、平和な日本、そして世界が永遠に続くことをお祈りしております。

【解説】

大東亜戦争開戦直前の昭和十六年十一月八日に要塞諸部隊は臨時編成及び編成の改正が行われ、羅津要塞重砲兵連隊も大幅な増強が行われた。同部隊の規模は陸軍省調査資料（十八年三月十日調査）によると、将校四十二、准下士官百二十四、兵七百八十一人、計九百四十七人とある。

それより以前、従来の日ソ国境守備担当の羅津要塞守備隊の任務は、朝鮮軍司令官直轄として混成第一〇一聯隊が国境守備担当となつていた。

大本営は、昭和十六年八月上旬、関特演により年内に対ソ作戦は行わないことに決し、八月十八日、朝鮮軍司令官に対し、国境紛争等の処理では事態を局地に限定することに努めるとし、国境守備のためには羅津守備隊の外、要すれば動員実施及び補充交代に支障なき範囲における留守部隊の兵力を使用し、己むを得ざる場合のみ第十九師団の一部を使用することを指示していた。

このため、この羅津要塞守備隊等に代つて、朝鮮司令官の直轄として混成第一〇一連隊が国境守備に当たることになった。

かくして羅津重砲兵連隊（朝鮮第七四〇二部隊）は、昭和十六年十月、朝鮮半島の戦備業務につくことになり、羅津重砲兵連隊は羅津要塞重砲連隊と改称し、改めて再配置についた。そして連隊は要塞司令部保管の予備火炮も展開して砲台等に備

付け配備することになった。

羅津重砲兵連隊史によると、関特演では一個大隊本部、六個中隊編成で、陸正面に大隊本部、二個中隊、海岸要塞正面に六個砲台で四個中隊、更に昭和十七年四月の戦備では二個大隊六個中隊に編成が改正されている。

当時の、我が国の要塞重砲兵連隊は、下関、東京湾、老岐、対馬、奄美大島、鎮海湾、父島に各要塞重砲兵連隊があり、現実には、羅津連隊はソ連国境に近く海正面以外、陸正面も極めて重視されたため増強されている。

体験記筆者は、こんな中、昭和十八年十一月に志願兵として、この羅津要塞重砲兵連隊第六中隊に入隊している。この第六中は郭端砲台に在り、三八式一〇センチ加農砲二門を配備していた。

同連隊の略歴を見ると

昭和十四年、羅津重砲兵連隊（朝鮮第七十一部隊）羅南山砲第二十五連隊内にて編成される。

昭和十六年七月三日、羅津要塞に防空隊が編成

される

同年十月十一日 羅津要塞重砲兵連隊（朝鮮第七四〇二部隊）に改称。

昭和十九年七月二十九日、内地転用命令

同九月十五日羅津出發

同九月十九日新湾着、内地防衛のため各地に分

散配備

昭和二十年一月二十二日 連隊閉鎖

同二月十五日 五部隊に編成完結

この昭和二十年一月の連隊閉鎖は、東部軍の管理下の復帰下令により、羅津重砲兵連隊は五年八カ月で閉鎖となり、次の四個部隊に編成された。

重砲兵第十四連隊、独立重砲兵第三十五大隊、東京湾要塞第二砲兵隊、独立重砲兵第四中隊。

これら内地転用部隊は内地各地で戦闘もなく終戦、逆に羅津の残留部隊は、終戦時のソ連軍侵攻により苦闘の連続で、北朝鮮正面でも激烈な防衛戦が行われたことが記録されている。